ホイットマンの thanatopsis について

稲　垣　春　男*

Whitman's Thanatopsis

Haruo Inagkaki

要　旨

この小論はホイットマンの thanatopsis（死観）を，そのライフ・ワークであり，彼の生活の支柱でもあった「草の葉」(Leaves of Grass) に焦点をおいて解明しようとするものである．

詩人としてのホイットマンの生涯は，南北戦争（1861 — '65）をふくむ時期を中心（第二期）として，その前後と，三つの時期に分けられる．そしてその死観も (1) 超感覚的段階（transcendental phase), (2) 悲劇的段階（tragic phase), (3) 哲学的段階（philosophic phase）をとおして，より深く，より安定したものに成長していったのである．

「生」と「死」を対立させて，その融合点で弁証法的に「第二の生」—「新生」を見出し,「死」を「生」の耕作の後に訪れる収獲の歓びとして迎える，ダイナミックで楽天的なその観想は，雄大なるヒューマニズムや僚友愛などの活力源（とりいれ）から投射された，彼独自のものであり，アメリカの国民的詩人と言われる彼の精髄であった．

Synopsis

This article intends to clearify Walt Whitman's thanatopsis, focusing our attention on "Leaves of Grass" which was his poetical lifework and also the sustenance of his life.

The life of Whitman, as a poet, is usually divided into three periods, placing the period, during which the Civil War (1861-'65) is included, at the middle. His thanatopsis developed also through three phases as follows; (1) transcendental phase, (2) tragic phase and (3) philosophic phase.

His characteristic attitude towards Death is, first to confront it with Life and then find dialectically the Seeond Life—New Life, as the synthesis of the two. He accordingly welcomes Death, in his distinguishably dynamic and optimistic way, as the harvest coming from Life, the tillage. This thanatopsis is entirely his own, and at the same time the essenee of Whitman, the National Poet; it was projected from his grand humanism and comradeship, which together produced his unceasing vitality.

1892年（明治25年), W. ホイットマン (Walt Whitman) (洗礼名は Walter) は72歳にして，彼の知友トローベル (Horace Traubel) に右手を託しながらこの世を去った．彼は悪寒におそわれたあと，肋膜炎，肺結核などの余病を併発し，すでに3か月余の病床生活を送っていたのである．最後まで意識を失わない，平安な落ち着いた往生であった．3月26日土曜日，日の光薄れゆく夕方，窓外にはこの不世出の民衆詩人に捧げる挽歌のごとく，小雨が静かに降っていた．

この偉大なるホイットマンは生前いかに「死」を感じ，彼の唯一の詩集「草の葉」(Leaves of Grass) の中で，いかにそれを歌い上げていたであろうか．この「草の葉」こそ，1855年の初版では，わずかに12篇の詩をおさめた95ページの小冊子であったが，没年の9版——臨終版 (Death-bed Edition) では，290余編の大冊に成長していたものである．それは，彼自身の精神の変遷を刻んだ年輪とも言える詩集なのである．また，一生妻帯しなかったホイットマンが，この世にのこした高貴な形見でもあったろう．

小林一茶が「おらが春」を著わした文政2年に生まれた,「全人的表現」の詩人，ホイットマンがのこしたこの詩集は，その没年の明治25年に，当時の一大学生，夏目金之助（漱石）によってはじめて日本に紹介されている．

×　　×　　×　　×　　×

ホイットマンが滅びゆくもののもつ暗きムードを脱して，淡淡と死をとらえ，むしろ死の光をすら感じて

* 助教授　一般教科

いると思われるケースとして,「遅咲き(おそざ)のライラックが庭先に咲いたとき」(When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd) (1865—'66) を取り上げてみよう. これは「リンカーン大統領の追憶篇」(Memories of President Lincoln) にある詩で, 1865年9月に印刷された「軍鼓の響き」(Drum-Taps) の続篇にのっていた. 詩人はこの詩の第7節でつぎのように表現している.

(Nor for you, for one alone,
Blossoms and branches green to coffins all I bring,
For fresh as the morning, thus would I chant a song for you O
    sane and sacred death.)(1)

(御身の——御身一人のためでなく,
すべての棺(ひつぎ)に花と緑なす枝を捧げる.
朝のごとく爽やかに, かく私はあなたのために歌をうたう.
おお健やかにして聖き死よ。)

ホイットマンは, アメリカ文学における自由詩 (free verse) の父とみなされており, その詩の行間に見られる潮流の渦巻のような詩想や, 情緒の力強い流動, 起伏は, 後に C. サンドバーグ (Carl Sandburg) やフランスの自由詩運動に影響を与えている. とくにこの「ライラック」の詩は, アメリカ文学における一大挽歌(エレジー)である.

この詩には三つの主要なシンボル (象徴) がある. すなわち, (1)「強い力をもった, 西の方に落ちて行く星」→リンカーン, (2)「ライラック」→青春, 更新していく自然, 生命, そして (3)「つぐみ」(hermit thrush)→感じ易き心と, 表現の才能(2) である. このうち, (1)のシンボルの例として, 第8節の中のつぎの数行を取り上げてみる.

O western orb sailing the heaven,
Now I know what you must have meant as a month since I
    walk'd,
As I walk'd in silence the transparent shadowy night,
As I saw you had something to tell as you bent to me night after
    night,

(おお, 上天をゆく西方の星よ,
私が歩きまわってから一月たったこの日, このとき,
私はお前が意味してきたに相違ないものを知った.
私が清らに澄んだ, かげろう夜を黙って歩いたとき,
夜毎私の方へ身をかがめて, 何事かを語ろうとするお前を見たときに,)

ここには, リンカーン大統領の死の事実を背景にして, 一月も歩きまわった後, 天体 (the evening star, Venus) の黙示のうちにひらめく意味を会得するという, 東洋的な神秘感がただよっている. この天体こそ, 去って行った偉大なる僚友の, やさしい魂にほかならなかった.

また,「死の出口なる生の歌」(Death's outlet song of life) という趣きが,「つぐみ」の血のにじむような歌をとおして, 詩の全篇をおおっており, 霊魂の不滅, 来世の信仰へと立ち返っていく, ホイットマンの「死」の受けとめ方が読まれる. それは同僚愛,(3) 人道精神(4) とともに「草の葉」の随所に,「精神的な美しさ」としてクローズ・アップされているものである.

アメリカ大陸横断鉄道の完成, 西部への関心など, いわば世俗的な趣味と物質文明への賛仰が強くあらわれていた彼の時代において, この精神美をたたえる詩人がはたした役割は計りがたい. 彼が祖国アメリカに期待したのは, 偉大な個性を多数生み出すために存在する, 自由社会の姿であった.

ホイットマンと「死」の想念との結びつきを, 1882年に出版された, 彼の「自選日記」(Specimen Days) によってさかのぼると, 彼は10歳のときフリゲート艦フルトン号の爆発事故(5)で亡くなった, 43人の水兵の軍葬を見ている. おおいをかけたドラムの響き, 死者のための厳粛なマーチに多大の感銘を受けたことが記されている.

1836年(17歳)の夏から1841年(21歳)の春にかけてのホイットマンは，「二十の扉」(Twenty Questions) などの教育的ゲームを考案し，興味のもてる課題をあたえ，答よりも説得の効果に重きをおくというような訓育方針をいだく教師[6]であった．この間彼は墓場や死の哀愁をうたった，18世紀のイギリス叙情詩人たちのスタイル (‘graveyard’ tradition) を模した詩を作っている．その一つはつぎのように始まっている．

O mighty powers of Destiny!
When from this coil of flesh I'm free—
When through my second life I rove,
Let me but find *one* heart to love
　　As I would wish to love.[7]
(おお，力強き「天」の御手よ！
私がこの肉体の絆(きずな)を脱し，
第二の生へと流離(さすら)いゆくとき，
愛らしい一つの魂を見つけさせて下さい．
　　私が心から愛したくなるような魂を．)

ここにも「死」(第二の生) を，「愛」(生きる営み) と結びつけながら，不朽にしようとするホイットマン独自の思念がみられる．詩中の「肉体の絆(きずな)」(coil of flesh) は後年，「天界よりの死のささやき」(Whispers of Hevenly Death) 篇中の「ほどなく死んでゆく人に」(To One Shortly to Die) (1860年作) の詩では，この世にのこす亡骸(なきがら)——「排泄物的」(excrementitious) なもの，として描かれている．

ホイットマンの最初の小説といわれる，雑誌「民主評論」(*the Democratic Review*) (1841年の8月号) にのせた「教室内の死」(Death in the School-Room)は，よその家の庭から果実を盗んだという嫌疑をかけられながら，貧困なるが故にそれを晴らすことのできない，一児童トム (Tom Baker) をののしり，それと知らずに教室内で，その死せる躯(むくろ)に籐(ラタン)の鞭をふるう教師ルーガー (Lugare) の残忍な姿を描いている．その不気味な雰囲気の中にも，猜疑，威嚇(かく)，冷酷など，人間の醜い諸感情にたいする「抵抗なき死」の勝利，といったものが感ぜられる．ホイットマンがその作家としてのスタートにおいて，すでに「死」に対決し，そのなかに光明を見出そうとする心構えをもっていたことを示す作品と言えよう．

1842年の3月 (22歳のおり)，ウルフ (Charles Wolfe) の詩，「コラナにおけるジョン・ムーア卿の埋葬」(The Burial of Sir John Moor at Corunna) の詩を模して，当時不遇のうちに亡くなったマンハッタンの風変りな詩人，クラーク (McDonald Clarke) に捧げる捩(もじ)り詩 (parody) を「オーロラ」(Aurora) 誌にのせた．「マクドナルドの死と埋葬」(The Death and Burial of McDonald) がこれで，詩中ホイットマンは，身寄りの人，親しき友人などの見送りもない，したがって悲しみも涙も伴わないクラークの埋葬にたいして，朽ちざる名声の祝福を与え，かつ天国での栄光を祈っている．

翌1843年の春は，民主党の機関紙「政治家」(the *Statesman*) の編集にあずかり，これに「自然を愛した人の死」(Death of the Nature-Lover) と題する詩一篇をかかげている．この詩はその4年前 (20歳のおり) に，ロング・アイランド「民主党員(デモクラット)」紙(the *Long Island Democrat*) に，「わが門出」(My Departure) というタイトルでのせている．この「わが門出」の終りの2節は，つぎのとおりである．

To the wide wind I'd yield my soul,
　　And die there in that pleasant place,
Looking on water, sun, and hill,
　　As on their Maker's very face.

I'd want no human being near;
　　But at the setting of the sun,
I'd bid adieu to earth, aud step
　　Down to the Unknown World alone.[8]
(吹きわたる風に，私の魂をゆだねよう．

そして，かなたの心地よきところで死のう．

海を，日射しを，そして丘を，

それらの造物主の顔を見るような気持で，のぞみながら．

近くに人は，いないほうがよい．

日の沈みゆくときに，

地上にさようならを言って，そして

ひとりぼっちで，未知の世界へと降りて行こう．）

「自然を愛した人の死」では，本詩最後の "alone" という語はなく，"pleasant place" が "fragrant place"（香床しきところ）となり，眺める対象は，"water, sun, and hill" が "blossom, field, and bay" と変わっているが，自然の風物に抱擁される喜びのなかで，黄昏時(たそがれどき)，未知の世界へ一人旅立って行く「死」をたたえる趣きは，全く共通のものである．

ホイットマンの「回想録」(A Backward Glance o'er Travel'd Roads) によると，彼は16歳のときに，スコットの作を手にしている．このスコットに，「死はさいごの眠りである．いな，それはいちばんさいごの目覚めであるのだ．」という言葉があることを考えると，ホイットマンの死観とのあいだに一脈の類似性が見出されるように思う．また後には，夏や秋いなかに行って，よく海辺で，新旧約聖書，シェークスピア，オシアン，ホーマー，イースキラス，ソフォクレスなどの立派な飜訳物とか，ニーベルンゲン，古代印度の詩，ダンテの詩などに読みふけっていたのである．(9)

詩人が十歳のおり，当時教会からしめ出されていた，クェーカー派の教会分立論者，ヒックス (Elias Hicks) の説教を，両親とともに一ホテルで聞いて，心に刻んだことはよく知られているが，その死生観にうかがわれる深遠な宗教性の閃き，東洋的な輪廻(りんね)の光芒は，上記の読書内容からも発せられていたのであろう．また彼が「死」を想う規模の壮大性も，「魚の形をしたポーマノック」(fish-shape Paumanok) の島に生まれ，「絶え間なき奇跡」(a continuous miracle) である海に，常に親しんだという自然的環境とともに，これらのギリシアの悲劇詩人や，ゲルマンの英雄ジークフリートが果した役割を思うべきであろう．

哲学的には，「民主主義哲学」(democratic metaphysics) といえるものをもち，文学は人間同志を結びつける手段であるとしたホイットマンにとっては，その詩集「草の葉」は，人類の「兄弟愛」の賛歌 (paean) であった．同時にそれは，その中心主題として「不死の自己」(deathless self) を伴い．自然における「新生（再生）」(regeneration) を象徴的に表示するねらいをもつものであった．これらのねらいは，個々の読者に訴えるところの創造的衝動 (creative impulse) と，読者から生まれ出る反応的衝動 (reactive impulse) の間のどこかに，存在領域を見出すところの彼の詩の特性により，強力に達成されている．

この「草の葉」(1855年版) の序文で，彼は偉大なる詩人の特色を詳しく述べている．すなわち偉大なる詩人は，未来が現在と一致するところに自らの位置を定め，現在の中に永遠を見出す存在であることを説いている．

彼の時間についての考え方によると，過去と未来は切り離されるものではなく，結合されるものなのである．偉大なる詩人は，過去と現在から未来にたいする一貫性を形成する人である．「彼は死者を棺(ひつぎ)より引き出して，再びその足で立たしめ，過去にたいしてはこう呼びかける．『立ちて歩め．しかして君の実体を我に示せ．』と．」(He drags the dead out of their coffins and shouts them again… he says to the past, Rise and walk before me that I may realize you.) G.W. アレンもこのことを，「つまり，詩人はその想像のうちに過去を生き生きと再現する力と，その予言者的な直覚力とによって，未来がかくあるべき姿をさし示すだけでなく，それを眼前に将来するのである．」(10) と説明している．

「草の葉」に視点をおいて，前にあげた「回顧録」により，詩人としてのホイットマンの生涯をみると，三つの時期に大別される．それは次のように，「草の葉」成長の三時期でもある．

第1期	壮年期 (36—41歳)，	「草の葉」初版—第3版，	南北戦争前 (1855—'60)
第2期	中年期 (42—53歳)，	「草の葉」第4版—第5版，	南北戦争以後 (1861—'72)
第3期	老年期 (54—72歳)，	「草の葉」第6版—第9版，	重病以後 (1873—'92)(11)

thanatopsis の観点からすれば，この区分による第1期においては，「銘詩」(Inscriptions) の中の「自己

の歌」(Song of Myself) の長詩や,「アダムの子ら」(Children of Adam) の中のもろもろの詩など,「異性間の愛」(amativeness) や「僚友の愛」(adhesiveness), 肉体の礼賛, 霊的宇宙などの多彩な表現の中で,「死」の姿は見出される. それはやや病的な性格を帯び, 苦渋の影を宿しているが, 超絶的な高処(たかみ)から「死」に投射された, 救いにむかう努力の跡は, 明らかにうかがわれる.

第2期においては,「軍鼓の響き」(Drum-Taps) 篇中の「一夜, 戦場で果した不思議な通夜」(Vigil Strange I Kept on the Field One Night) (1865)などの一連の詩や, 前にもちょっとふれた「天界よりの死のささやき」(Whispers of Heavenly Death) 篇中の詩などが, 代表作として挙げられる.

南北戦争に看護人として従軍し, 労苦の日々の中で, 戦友のうちに多数の死者, 負傷者たちを凝視した体験は, 彼に「死」の姿を客観的に, 冷静にとらえることを教えている. ここに将兵たちの小我の「死」は, 南北の統一によるアメリカという大我の「誕生」をもたらすもの, という想念が生まれるのである. 人間の死観は, 所詮彼が遭遇せる死者の様態により形成され, またそこに自己の死を類推することになろう. ホイットマンの場合は, その多感な心に, 戦場の「死」の姿がまざまざと印象づけられただけに,「死」への意識はきわめて強烈であった. 当然, この間における彼の「死」の考察は, 一段と深味をおびていくのである.

また, 既述の「ライラック・エレジー」では, 彼の敬愛するリンカーンの死をとおして,「死」の賛歌がかなでられている.「自選日記」(Specimen Days) によれば, 1865年4月16日付けで,「大統領リンカーンの死」(Death of President Lincoln) の一文があり, アメリカの統一 (Union) を将来せる, 最大の恩人としてのリンカーンをたたえ,「統一は暗殺されえない」(—but the Union is not assacinated—) ことを述べ, 歴史が生き, 愛国心が存続するかぎり, リンカーンの名は不滅であるとつづける. そして「死」は, 大統領にも一兵卒にも訪れてくるであろうが,「国家は不滅である.」(—but the Nation is immortal.)(12) と結んでいる.

この「自選日記」には上述のリンカーンの死についての記述のほかに, 1868年6月14日付けで, 自然観照の散歩をともにし合った, 30年来の知己, ブライアントの葬式に参列したことが書かれている. この文 (Death of William Cullen Bryant) の末尾では, 6月の美しき自然のなかに, 永遠の安息を見出す「死」の喜びをうたった, ブライアントの詩,「六月」(June)(13) の第2節を引用している.

第3期においては, 真の自己は霊魂であり, それはさらに自然の霊へ, 神聖なる起因へと, 帰って行くものであるという, 輪廻(りんね)転生の観念がうかがわれ, 彼の宗教性, 哲学性の最後の完成を見る趣きがある.

スーフィ教派の白髪の老僧が, 年古りた栗の木の下蔭で, 学僧たちに上帝 (Allah) こそは万有であると説く,「ペルシアびとの教え」(A Persian Lesson) (1891) はこのような詩の一つである. この詩は, 彼のこの時期の代表作である二つの追補篇 (Annex), すなわち「古稀の流砂」(Sands of Seventy) と「我が空想よ, さらば」(Good-Bye My Fancy) のうちの, 後者に属している. それはつぎのように結ばれている.

> "It is the central urge in every atom,
> (Often unconcious, often evil, downfallen,)
> To return to its divine source and origin, however distant,
> Latent the same in subject and in object, without one exception."(14)
> 「あらゆる原子には中核的な衝動がある.
> (それはときには無意識に, ときには邪(よこしま)なやり方で, 破滅することもあろうが,)
> いかに遠くとも自分たちの神聖なる根源へと立ち返って行くその衝動こそ,
> 一つの例外とてなく, 主体にも客体にも一様に内在するものである.」

「昼より星の輝く夜へ」(From Noon to Starry Night) 篇中の,「晴れわたる深夜」(A Clear Midnight) という詩において, 眠り, 死, 星とともに霊魂 (Soul) の最愛の主題 (the themes thou lovest best)(15)と詩人自らたたえている夜のイメージも, 第1版, 第2版では, 生成発展の根元たる性と結ばれて,「女」として見られ, ついでその抱擁を主として「母」と見られるが, 第3版以後には死を思う場として現われる.(16)

この時期の詩篇,「古稀の流砂」のなかの「薄明」(Twilight) (1887) には,「靄—涅槃(ねはん)—憩いと夜—忘却」(A haze—mirwana—rest and night—oblivion.) といった表現が, 自分の死が投げかける不安の影から浮かび出てくるし,「軍鼓の響き」篇中の「和解」(Reconciliatian) (1881) では, 殺傷の行為ですっかり汚

された戦場を，「死」と「夜」の姉妹がその手でやさしく，休むことなく洗い浄めるのである．

なお前記の区分のほかに，今から30年以上も前に，次のような別の区分もされている．[17]

第1期 1855—'58 超感覚的（超絶的）段階（transcendental phase）[18]

第2期 1859—'65 悲劇的段階（tragic phase）[19]

第3期 1866—'92 哲学的段階（philosophic phase）

この区分によると，南北戦争（1861—'65）の4年間が第2期に属することは，前の区分と同じだが，1866—'73年の7年間が加えられるため，第3期がかなり長くなる．[20] 作品をとおして調べると，例えば第2期の代表的詩篇「天界よりの死のささやき」にしても，両区分に共通するのは18の詩のうち，「流砂の年月」（Quicksand Years）一つとなってしまうが，この詩篇自体が第2期の代表作であることは動かないのである．ただ篇中，超感覚的性格を帯びながら，若者，若い女性，幼い子供たちの無常の死の悲しみに，また海底の藻屑となった一切の不幸な人々の上に，「聖なる死」（Heavenly Death）が用意されている，という信仰を表白せる詩，「確証」（Assurances）（1856）は，例外として第1期に属している．

本研究は，「草の葉」を中心視点とした関係上，先に掲げた方の区分によることとし，以下三つの時期のそれぞれについて，彼の「死観」（thanatopsis）を示すと思われる代表的な作品を挙げながら筆を進める．

〔第1期〕　（1855—'60）

1855年（36歳のおり）の7月11日，詩人の父ウォールター（Walter Whitman）はこの世を去った．この時期においては，「死の妄念」（obsession with death）がときどきつきまとうが，彼は自らを「生」（Life）そのものに高め，「死」を拒否する生命力（life-force）に一体化することによって，「死」からの救いを得ようとしている．

1855，'56年と，ホイットマンのこの肯定的な洞察態度は，彼の身辺の世界に引き続き注がれる．

◦「自己の歌」（Song of Myself）　（1855）

初版12篇の詩の一つ．しかもそのうちの最良の作品である．第2版では「アメリカ人，ウォルト・ホイットマンの詩」（A Poem of Walt Whitman, an American）という表題ででている．現在の表題は，1881年に変更されたものである．この詩は52部，1345行からなり，彼の詩作中最も長く，かつ最も特徴的なものである．

作者は彼自身を媒介として，結局人間一般に通ずる自己（the self）をうたっている．中に出てくる「草」は「植物より生まれ出でし赤子」（the produced babe of the vegetation）（第105行）であり，北に南にすべての地帯に生育するその性格から，あらゆる生命の普遍性，類似性を代表するものである．そして「その最も小さな芽の発生も，本当のところ死などあり得ないことを示す．」（The smallest sprout shows there is really no death,）（第126行）と書かれている．かくて融通無碍(げ)の「私」は，ときには彗星のように，髪をふり乱して去りゆく太陽を追って驀(ばく)進するかと思うと，また急転直下身をひるがえして，地上の芥(あくた)となり，草となって，人々の靴の下にひそむのである．

前行，"They are alive and well somewhere," と老若の死者について語っているのは，その輪廻(りんね)（metempsychosis）の想念のあらわれとみられるが，その意図は事実の表現というより，我々をしてかくリアルに感ぜしめることにあったと思われる．

彼の直覚力（vision）も確実な，安定した性格のものというわけではなく，超感覚的であるとともに悪魔的な存在ともなり，力や希望を導き出すとともに，恐怖の悪夢をもたらすことを辞さないのである．ホイットマンの作品のなかには，当初よりこの種の争いがみられ，「自己の歌」も，その大略 1/15 はこの悪魔的（demonic）な性格をもつと言われ，その不気味な爪跡も随所にみられる．それは「草」（Grass）の意味を解明する部分にも，威迫のかたちをとり，また，詩中のいろいろなイメージにも忍び込んで，暗影を投じている．

「キリストよ，私は激発する感情に打ち負かされそうです．」（O Christ! My fit is mastering me!）という苦悶と敗北感の叫びを発したのち，詩人は彼の悪魔的なるものへの勝利を再確認しなければならなかった．詩人はまた言う，「死よ，死することの運命(さだめ)のにがき抱擁よ，私をおどそうとしても無益なことだ．」

(And as to you Death, and you bitter hug of mortality, it is idle to try to alarm me.)（第1289行）と，詩中のこの暗き要素は，決して偶然的なものではなく，詩人がそれとの対決に生存の意義を感じた，敵対者であった．「自己の歌」はかかる勝利の叙事詩であった．(21)

第47部の1250行には，「私は断言する．家の中では，恋愛や死については二度と語るまい．」（I swear I will never again mention love or death inside a house,）とあり，自然の外気の中に，彼自身の飜訳された姿を見出すことを念願とし，自然に抱かれる死を賛美し，「自然の理想化」(idealization of nature）を本領とせる詩人，ホイットマン，の面目が躍如としている．それは，「自然に還れ．」と主張した仏人ルソー（Jean Jacques Rousseau）の，革新的な所論に相通ずるものをふくんでいるのである．

◦「眠れる人々」(The Sleepers)　(1855)

初版では第4番目の詩．「秋の小川」(Autumn Rivulets) 篇にある詩で，8部より成る中篇．この詩の第9—10行では，生と死はともに夜の遍満のうちにつつみこまれていく．

　　　　……………… , the new-born emerging from
　　　　gates, and the dying emerging from gates,
　　The night pervades them and infolds them.
　　(…………… ，門から出て来る新生の魂，そして，門から出て来る瀕死の者，
　　夜は彼等に滲み透り，彼等を覆い包む．）

第66—7行では，「私」は屍衣となって，墓場の地下で死者をつつんでいる．

　　A shroud I see and I am the shroud, I wrap a body and lie in the
　　　　coffin,
　　It is dark here under ground, it is not evil or pain here, it is blank
　　　　here, for reasons.

「死」は暗く，悪とも苦痛ともはなれたもの，そして理性にとっては空白の状態というわけである．そしてここから次行の，光の中にあり，空気を呼吸していること自体が無上の仕合わせであるという自覚が生まれてくる．

　　(It seems to me that every thing in the light and air ought to be
　　　　happy,
　　Whoever is not in his coffin and the dark grave let him know he
　　　　has enough.)

この詩は，1855年版に出た「自己の歌」の姉妹篇であり，全体において「生」と「死」と「再生」という，自然の周期に対する彼の信仰が美しく象徴されている．この時期のホイットマンは，いわゆる「死を愛する」(be in love with death) 人ではなくて，「死」の目的を「第二の生」の出発と確信する態度で「死」を享受する人なのである．

詩中の「私」"I" は，「自己の歌」の中の「私」"I" とは違って「私自身」"Myself" ならざる「私」であり，受動的で無能力なる「私」である．第29行"………, I sleep close with the other sleepers each in turn," における，他の眠れる人々にかわるがわる身を寄せてとる眠りの状態では，ホイットマンは目覚めた直感力の働きのもとでは鎮圧されていた，暗がりの潜在意識に語りかけることを許しているのである．

この詩には，(1)本質的にはエディプス的 (oedipal) な性格をもった，無意識の自叙伝，(2)苦悶と罪のムード，そしてそれに付随する残忍な怒りがある．しかもこれらに対して，一切を抱擁し，慰撫をあたえる母性的要素が共存している．「死」，そして「自己喪失」(self-less) に非る「眠り」の想念がある．「死」は「夜」の類推により，「夜の元気づけと化学作用を受けて，」(They pass the invigoraton of the night and the chemistry of the night,)（第176行）「新生」へと覚醒するのである．

第143行の "The night and sleep have liken'd them and restored them." もかかる一切のものを同一視し，そのもとの姿に復元する「夜と眠り」——「死」の働きをうたっている．「死」の主題は「眠り」の姿をとることにより抵抗少なくうたわれているのである．(23)

◦「この堆肥」(This Compost)　(1856)

同じく「秋の小川」篇にある詩.

「廃頽」(corruption) の中から新鮮なるものが生まれ，「数限りなく連なる病死体」(endless successions of diseas'd corpses) とともにありながら，何の汚れも見せずに，「地球」は地軸の上を回転する.

「死体」は，不快をもたらさぬ良き肥料なのである.(「自己の歌」より)

And as to you Corpse I think you are good manure,
　　but that does not offend me,

すでに何万回となく死を重ねている私自身にとっては，「生命」も「多くの死の遺物」なのである.(同じく「自己の歌」より)

And as to you Life I reckon you are the leavings of
　　many deaths,
(No doubt I have died myself ten thousand times be-
　　fore.)[24]

ここにも，彼のこの時期の特色といえる，生と死の一体感，融合感がある. 死の影は同時に生の囁きでもある.

◦「大斧(おおおの)の歌」(Song of the Broad-Axe)　(1856)

カラマス (Calamus) 篇の，後の方の詩群 (12篇) 中の一つ.

人間の斧によってつくり出される具象的，精神的な，もろもろの構成物の，モンタージュ的イメージをとおして，詩人の「新しき生の創造」の信念を述べている. すなわち，「生を鼓舞するものは，同時に死を鼓舞するもの」(What invigorates life invigorates death,) (第95行)，「今に変わらずその時も，生者に，はたまた死者に貢献せる」(Served not the living only then as now, but served the dead.) (第165行) ものであり，「個人の特質こそ永続するただ一つのものである」(And nothing endures but personal qualities.) (第99行) ことを，大斧の男性的な音響のなかでうたっている.

1857年の若干の詩，「路傍にて」(By the Roadside)篇中の「坐して眺める」(I Sit and Look Out)，「手鏡」(A Hand-Mirror) などには，慰謝を伴わない罪悪，死の想念があらわれている. 子供の親不幸に悩む痩(や)せ衰えた下層社会の母親，良人に虐待される妻，暴食する者の不健康な顔などが，飢餓，戦争などとともに登場する.

1858—'59年の期間には，愛情問題でホイットマンに精神的危機が到来し，1858年には詩作もなく，1859年になって「カラマス」(Calmaus) の詩群と，この年の総決算 (summation) と目されている，次の三つの詩が誕生している.

(1)「絶え間なくゆれ動く揺籃(ゆりかご)から」(Out of the Cradle Endlessly Rocking)　(1859)

「薄汐草」(Sea-Drift) 篇にある詩. ホイットマンの叙情詩 (lyrics) 中の最傑作の一つとして挙げられるだけでなく，アメリカ文学中においても，最も暗示的で印象的な詩の一つであると言われている.

時は五月，アラバマから渡って来た，相愛の一番(ひとつがい)の小鳥にまつわる悲劇——つれあいを失った雄鳥の悲劇，の詩である. ここでは，少年に姿を借りたホイットマンが，その「死」の想念をうたっている. 愛するものを失うことの悲しみが絶叫される. そして，一切のものの背後に規則的なリズムをかなでていた海が，或る瞬間から少年の耳に「死」をささやくところの，身近な，ショッキングな存在に変貌する.

それはブレイク (William Blake) の世界にも似た，意識と無意識，現在と現在以後とが混在する境地である. この間の恍惚感は，超絶的な直感のひろがりから，第2期の冷厳なる死に注がれる客観的凝視へと進んで行く，一つのステップである. 雌鳥の死 (two together no more) をとおして，この世の生は愛することであり，その愛をうたうことこそ，詩人たらんとする自己の使命であるという自覚を与えられる.[25]

「死」のささやきはつぎのように語られる.(第165—173行)

Whereto answering, the sea,
Delaying not, hurrying not,
Whisper'd me through the night, and very plainly before day-
break,
Lisp'd to me the low and delicious word death,
And again death, death, death, death,
Hissing melodious, neither like the bird nor like my arous'd child's
heart,
But edging near as privately for me rustling at my feet,
Creeping thence steadily up to my ears and laving me softly all
over,
Death, death, death, death, death.
(それに答えながら，海はおくれず急がず夜通しささやいた.
そして夜明け前にきわめてはっきりと，低く甘いことばで死を語ってくれた.
死，死，死，死と，繰り返しながら.
小鳥のとも，私の目ざめた子供の心とも似ていない甘美なささやき，
それはひそかに私の足もとに近づきながら，さらさらと音(ね)をたてた.
足もとから私の全身を浸して，私の耳もとに這いよってきた.
死，死，死，死，死と.)

第167行の “Whisper'd me” (whisper'd to meではなく) の表現は，主体と客体の融合感からの表現と言える.

第168—169行は，初版ではつぎのように書かれていた.

Lisp'd to me the low and delicious word DEATH,
And again Death—ever, Death, Death, Death,

すなわち，現在のように「死」(death) は4回の繰り返しではなくて，数えられぬ永遠 (ever) なものであった. しかしすべてを予言しようとするホイットマンの性格としては，この “ever” は落とさざるを得なかったものと思われる.

海の存在は，非我 (Not-Me) として，運命 (Fate) として，宿縁 (Karma) として，小鳥とも，少年とも無縁にさざめいているが，新しき「我」を求めて悩み，懐疑の淵にはいった少年の耳には，秘密のことば，「死」，を語る存在と変わったのである. 海は少年を激情 (passion) から知覚 (perception) へと導いた. それは「自己の歌」に感ぜられた，「髪をふり乱した女主人」としてではなく，受容力をそなえた詩人が，いつにでも迎えられる「女神」として存在した.「自己」とこの世の断絶感を救済してくれる，身近にして神聖な「母」として存在した.

聞き入り，没頭し，悟入しようとする少年にとっては，月光，海の死の歌，小鳥の歓喜と苦痛の歌の一切が，詩の魂 (soul of the poem) となるのである. ホイットマンは，詩人のみの特権として，この「ゆりかごの歌」が存するかぎり理解されるであろうところの，

「海」(sea)→「死」(death),「永遠なる死」(ever death)

という，ことばの結びつきを生み出したのである.(26)

(2)「生命の海とともに潮退きながら」(As I Ebb'd with the Ocean of Life)　(1860)

同じく「藻汐草」篇にある詩.

彼自身の詩を「尊大」(arrogant poems) と反省し，「残骸」(debris) と嘆ずる態度が見え，救済的徴候を見出す能力にはかけている.

See, from my dead lips the ooze exuding at last,
(見よ，生気なき我が唇より，いまや流れ出るぬるぬるの泥，)

ここでホイットマンは，その超感覚的（transcendental）な段階に決別する．

(3)「我が胸のかぐわしき草」(Scented Herbage of My Breast)　(1860)

「カラマス」(Calamus) 篇にある詩．

この詩においてホイットマンは，「生の詩人」(the poet of Life) としての自分に決別し，渾然となった「草」と「愛」と「死」のイメージをうたう．しかもそれらは，「精神的に美しきもの」としての位置を保っている．

Yet you are beautiful to me you faint-tinged roots, you make me
　think of death,
Death is beautiful from you, (what indeed is finally beautiful
　except death and love?)
O I think it is not for life I am chanting here my chant of lovers,
　I think it must be for death,
For how calm, how solemn it grows to ascend to the atmosphere
　of lovers,
Death or life I am then indifferent, my soul declines to prefer,
(I am not sure but the high soul of lovers welcomes death
　most,)
Indeed O death, I think now these leaves mean precisely the same
　as you mean,(27)

(それでいて，お前たちは私にとって美しいものなのだ．
　ほんのりと色づいている根よ．お前たちは私に死を思わせる．
お前たちから来る死は美しい．(詮じつめれば，死と愛をのぞいて，
　美しいものがまたとあろうか。)
おお，私がここで，愛する人の賛歌をうたうのも，生のためではない．
　死のためなのだと思う．
なぜなら，それはいかにも静かに，いかにも厳かに成長して，
　愛する人たちの周囲へと高められていくからだ．
もう，死も，生も，私にはどちらでもよい．私の霊魂は択(え)り好みはしない．
(はっきりとは言えないが，愛する人たちの高貴な霊魂は，
　何よりも死を選ぼうとするのではないか．)
おお，死よ，私は今，これらの草の葉こそ，お前が意味するものと全く同じものを
　意味しているのだと思う．)

すなわち，この詩のねらいは，「愛」と「死」の観念を結合し，霊魂の真の意味の結びつきをもつことこそ，他の生活様相の一切を越えて，この世の基本目的であると訴えるにある．(28)

ここにはまた，「生きることは愛することでであり，愛することは失うことである．」(To live is to love and to love is to lose.) という愛の悲劇性がある．愛は死への出発であり，その帰結でもある．かくて第１期の特色である生の拡充による死の「超絶」ではなくて，「愛」とともに真の現実性をもつもの (real reality)，としての「死」が見つめられる．「愛」の強さがゆえに，「死」は「死」それ自体として美化され，何らの神秘性を伴わずに歓迎されるのである．

詩はさらに続く．

Through me shall the words be said to make death exhilarating,
(私をとおして，死を陽気にさせることばが語られるだろう．)

この一行に見られる，「死」に対決するホイットマンの楽天主義は同じ，1860年の詩，「さらば！」(So Long!)——「別れの歌」(Songs of Parting) 篇中の詩，にもみられる．

この「さらば！」の詩の終りの二行は，次のように書かれている．

…………, I depart from materials,
I am as one disembodied, triumphant, dead.
(………，私は物質の世界から離れて行く．
私は肉体から解き放されたもののように，喜び勇んで，寂滅するのだ．)

〔第2期〕　(1861—'72)

1861年（41歳のおり）の4月12日，サムター要塞（Fort Sumter）が南部連邦軍の砲兵隊により襲撃され，南北戦争（Civil War）が勃発した．'62年，ホイットマンは弟ジョージの名を，12月16日付のニューヨーク・ヘラルド新聞（the *New York Herald*）の負傷者欄に見出し，彼に会うべく急いでバージニア州のフレデリックスバーグ（Fredericksburg）に赴き，そこの陣営（camp）に九日間とどまった．しかも引き続き看護兵を志願すること約三年，この間兵士たちの生活にも馴れ，悲惨な傷病兵を十万人近く世話したといわれる．

彼は戦場で将兵たちが「死の笞」(lash of death）に耐え，不適格な統率者たちの誤った判断や，敗走の危局に直面しながらも，敢然と示したところの不断の勇気と，ゆるぎなき責任感のうちに，アメリカ国民の真の民主精神と健全性を確信するに至った．

1865年1月24日には内務省（Department of Interior）のインディアン部局員に任命され，6月30日には，「草の葉」の詩人である彼に不満をもっていた内務長官ハーラン（James Harlan）によって解任され，ときの副検事総長の同情を得て，翌日ただちに司法省に再採用となり，後に大蔵省書記官となった．この間，リンカーン大統領の二度目の就任式とその暗殺が相次いで起こっている．

つぎに，前と同様，彼の詩作のいくつかを年代順に列挙しながら，その「死観」の展開にふれてみる．

。「灰色に仄暗い暁の陣営の一光景」(A Sight in Camp in the Daybreak Gray and Dim)　(1865)

戦場の中に見出された無常の数数をうたった，「軍鼓の響き」(Drum-Taps) 篇にある詩．

ここでは，死の相貌は静寂と美と尊厳を伴って，キリストの面影としてさえ描き出されている．(結びの3行)

Then to the third—a face nor child nor old, very calm, as of
　　beautiful yellow-white ivory;
Young man I think I know you—I think this face is the face
　　of the Christ himself,
Dead and divine and brother of all, and here again he lies.(29)
(それから，三人目は——子供でも老人でもない顔，ちょうど，美しい黄色味がかった
　　白き象牙のような，きわめて落ち着いた顔である．
若者よ，私は君を知っているようだ．——この顔こそキリストその人のものだと思う．
死して尊く，万人の兄弟となった彼は，ふたたびここに来り，
　　その身を横たえているのだ．)

。「美わしの月よ，見おろしてくれ．」(Look Down Fair Moon)　(1865)

同じく「軍鼓の響き」篇中の詩．4行の短詩である．

「死」の不気味さや，「死」の影は，美わしい月の光の下ですっかり洗い浄められる．

Look down fair moon and bathe this scene,
Pour softly down night's nimbus floods on faces ghastly, swollen,
　　purple,
On the dead on their backs with arms toss'd wide,
Pour down your unstinted nimbus sacred moon.(30)

(見おろしてくれ，美わしの月よ，この場景をその光で浸してくれ，
溢れる夜の後光を，これらの不気味に腫れた紫いろの顔に，静かにそそぎかけてくれ，
両手をひろく投げ出した，仰向けの死体の上に，
御身のゆたかな後光をそそいでくれ，聖なる月よ.)

既述の「ライラック・エレジー」も同じ1865年の作である．これらの詩に見出される，弁証法的な感情の飛翔は，ホイットマン自身の経験のなかにも見出されるものである．ここに，ホイットマンは「死」を「知り」，「生」の究極的な意義，満足感を求める企ては放棄した．かくて彼の「死」の理解 (Understanding) のために必要な要素としての，新しき洞察により，「死の頌歌(しょうか)」(carols of death) をうたうのである．「天界よりの死のささやき」(Whispers of Heavenly Death) 篇中の同題の詩 (1868) や，「おお魂よ，今敢えて行なうのか」(Darest Thou Now O Soul) (1868) などがそれである．

○「**都会の仮死体収容所**」(**The City Dead-House**)　(1867)

「秋の小川」(Autumn Rivulets) 篇にある詩．

この詩篇中の1860年代の作品，「君たち，法廷で裁かれる重罪犯人よ」(You Felon on Trial in Courts) や，「賤しき一娼婦に」(To a Common Prostitute) においては，流水の如く，落葉の如く淡淡たる態度で語られる，凶悪犯人や娼婦への彼の同情 (compassion) や統合化 (integration) が見られる．

この詩においても，見捨てられ，引き取り手のない，哀れな売春婦の死体に寄せる詩人の同情があり，無常感の苦味(にがみ)を帯びた涙がそそがれる．

House of life, erewhile talking and laughing—but ah, poor house,
　　dead even then,
Months, years, an echoing, garnish'd house—but dead, dead,
　　dead.(31)

(結びの2行)

(かつては，且つ語り，且つ笑った生命の家，
——しかし，ああ，その時ですらすでに死んでいた家，
過ぐる幾年月，笑をどよめかせ，飾りつけられていた家，——だが，
死，死，死だけが存在していた家.)

○「**黙黙たる忍耐づよい蜘蛛**」(**A Noiseless Patient Spider**)　(1868)

「天界よりの死のささやき」篇にある詩．

最初1868年10月，ロンドンのブロードウェイ誌 (*Broadway Magazine*) にのせられた．1862年の無題の原詩とはすっかり趣きを異にしている．

霊魂は太虚の海原 (measureless oceans of space) の中にありながら，蜘蛛が細い糸を投げかけるように，結合すべき世界を求めながら (seeking the spheres to connect)，思索し，行動する．生死の境界にあって，霊魂の自由を探究する人間の力闘の姿が描かれている．

○「**インドへの航路**」(**Passage to India**)　(1868)

「秋の小川」篇にある詩．既述の「死の頌歌(しょうか)」の系列に続くもの．

墓の彼方，「神の海」(the seas of God) へと船出する霊魂 (soul) をたたえる．生死を超越した霊魂は，神の栄光の中に浸りつつ創造と結合する．この冷厳な「死」の美しさの「理解」(Understanding) の土台の上に，彼の全詩作の統合である，最後の哲学的段階 (philosophic phase) が打ち立てられる．

O soul, repressless, I with thee and thou with me,
Thy circumnavigation of the world begin,
Of man, the voyage of his mind's return,
To reason's early paradise,
Back, back to wisdom's birth, to innocent intuitions,

Again with fair creation.(32)

（第169—174行）

(おお，霊魂よ！私は御身と，御身は私とはなれずに，
御身の世界周航の旅は始まる．
それは人間にとっての心の旅路，
古き日の理性の楽園へ帰って行く旅路，
英知の誕生の地へ，無邪気な直覚へと，後退して行く旅は始まる．
再び美しき創造を伴いながら．)

◦**「農夫の耕すを見まもりて」(As I Watched the Ploughman Ploughing)**　(1871)

「蜘蛛」の詩に同じく，「天界よりの死のささやき」篇中の詩．4行の短詩．
ここでは農夫の収穫の場景の中に，「生」と「死」の関連の相をとらえている．

(Life, life is the tillage, and Death is the harvest according.)

（結びの行）

(「生」，生は耕作である．そして「死」はそれにともなう収穫(とりいれ)である．)

◦**「喜べ！同船者よ，喜べ！」(Joy! Shipmate, Joy!)**　(1871)

「別れの歌」(Songs of Parting) 篇にある詩．7行の短詩．
シャイバーグ (Schyberg) がホイットマンの挑戦的楽天主義 (optimism in defiance)，英文学の耆宿ポウイス (J. C. Powys) がホイットマンの「魔術的楽天主義」と表現している彼の楽天性は，「死」を「別の生」の姿としてすなおに迎え入れている趣の，この詩の中の「出航」の喜びによって，十分に首肯される．

(Pleas'd to my soul at death I cry,)
Our life is closed, our life begins,
The long, long anchorage we leave,
The ship is clear at last, she leaps!(33)

（第2—5行）

(死に臨み，私は喜びにみちて，自分の霊魂に叫びかける．
私たちの生は終わり，私たちの生は始まる．
長い長い錨泊の地を，私たちは去る．
船は今こそ錨を抜き放たれ，海路はるかに駆けてゆく．)

◦**「私の遺産」(My Legacy)**　(1872)

同じく「別れの歌」篇中の詩．
「草の葉」一巻にたいして彼が注いだ情熱と，彼の抱いていた愛着心がはっきりと吐露されている．

And little souvenirs of camps and soldiers, with my love,
I bind together and bequeath in this bundle of songs.(34)

（結びの2行）

(そして陣営と兵士達のささやかな記念品に，私の愛情を添え，
それらを束ねて，この一冊の詩篇にして遺贈する．)

×　×　×　×　×

1863年の秋，ホイットマンはワシントン在住の一友人エルドリッジ (Charles W. Eldridge) に，その後数年間の高原期(high plateau)の状態，そしてそれに続く急速な下降の傾向について手紙に書き送っているが，まさしく千里眼的な明察であり，1867年には「草の葉」第4版を出し，翌年に向かって彼自身の最盛期を歩むのである．このころには一流雑誌も彼の詩に良い値をつけている．(35) 1868年以降は健康の理由や精神的

な打撃（'70年夏の）などのため，彼の詩的精神の活力は急速に衰退して行った．

〔第３期〕　(1873—'92)

1873年（53歳のおり）の１月23日の夜，ホイットマンは第一回の脳出血の発作に襲われた．左半身とくに下肢の不随を来たしたが，三日後，ニュージャージィ州キャムデン（Camden）にいる母ルイザ（Louisa）に送った手紙では，「良くも悪くもならない.」(neither better nor worse) と真実を告げながらもその安心を求めている．自ら，震える手で勇気をもって書いたものである．

しかも其の後すぐ，５月23日に，この敬愛せる母の死に遭遇した．友人ドイル（Peter Doyle）宛の手紙によれば，これは彼の「一生のうちでの大きな暗雲」(the great cloud of my life) であった．中風症のため，政府が留任をすすめる吏員の職を退いてからは，前記キャムデンに移り住み，貧困のうちに晩年を送った．

第２期において，冷厳なる死に放たれた客観的凝視は，この時期になると自らの病患と孤独の境涯の中で，哲学的，宗教的なる悟入，沈静なる悟入へと移り進んで行った．発病後，72歳で没するまでの約20年間は，半身不随に苦しみ，ぼんやりした頭脳をかこちながら「コロンブスの祈り」(Prayer of Columbus) を，また死に瀕している巨木の叫びである「アメリカ杉の歌」(Song of the Redwood-Tree) (1874) を発表し，彼自身の夕暮の表白といえる「御身，上天にかかる目くるめき天体よ」(Thou Orb Aloft Full-Dazzling) (1881) や「たそがれ」(Twilight) (1887) によって落日のイメージを残し，一時病状の悪化せる69歳の年を，「六十九歳を終える祝い歌」(A Carol Closing Sixty-nine) (1888) をうたって送った．

1890—'91年の二年間は身体がこわばり，視力もすっかり衰え，没年の'91年には詩想の枯渇を嘆じながら，「我が空想よ，さらば」(Good-bye My Fancy) の詩群を書き，その一篇，「『草の葉』の主意」(L. of G.'s Purport) の結びでは，次のように決然として「死」を見詰めている．

Today shadowy Death dogs my steps, my seated shape, and
　　has for years—
Draws sometimes close to me, as face to face.
（今日，影のような「死」が，私の歩みを，また私の座っている姿を追ってくる．
　　永年そうしてきたのだが，………
ときには顔をつき合わせるようにして，ごく近くに寄ってくる．）

以下この時期の「死観」をうかがうに足るいくつかの詩を，年代順に挙げてみる．

◦「コロンブスの祈り」(Prayer of Columbus)　(1874)

「秋の小川」(Autumn Rivulets) の詩群につづくもの．

第１期，第２期の生気に溢れていた詩人の「死生観」も，この時期に入ると時折老廃をかこつ心境から，「人生」(life) にも「私自身」(myself) にも懐疑的となり，ひたすらに神に縋る瞬間が現われてくる．この詩では，かかるおりの熱烈なる祈念が捧げられている．

I am too full of woe!
Haply I may not live another day;
I cannot rest O God, I cannot eat or drink or sleep,
Till I put forth myself, my prayer, once more to Thee,
Breathe, bathe myself once more in Thee, commune with Thee,
Report myself once more to Thee.(36)

（第７—12行）

（私の悲しみはあまりにも大きい！
ひょっとすると，私は明日まで生きないのかも知れない．
休息することもできません，神様．食べることも，飲むことも，眠ることもだめです．
今一度「あなた」のうちに息づき，湯浴(ゆあ)みをし，「あなた」に心をかよわせ．
今一度私のことを申し上げぬうちは．）

ホイットマンが江戸時代の武士道書「葉隠れ」における「死の賛美」や，真言密教の「阿吽（あうん）」の思想に一脈相通ずる諦観，死生観を堅持しながら，絶えず死の影を見詰めて歌いつづけた詩人であることは，このような詩にあらわれた彼の心の傷口をとおしても十分に察知されるように思う．「草の葉」が日本でも早くから，前述の夏目漱石はじめ，内村鑑三，高山樗牛，岩野泡鳴，有島武郎らの紹介によって親しまれている所似（ゆえん）であろう．

。「あなたの門口にも死が」(As at Thy Portals Also Death)　(1881)

「別れの歌」(Songs of Parting) 篇にある詩．

ここにはホイットマンの敬愛していた，「神のごとき一元性」(the divine blending) をもった亡き母に寄せる，永遠の生の確信が述べられている．

To her, buried and gone, yet buried not, gone not from me,

（第4行）

（埋められて黄泉路（よみじ）へ去ったとはいえ，私にとっては埋められもせず，
亡き数にも入らぬ彼女にたいして，）

。「何処かへ行く」("Going Somewhere")　(1887)

「古稀の流砂」(Sands at Seventy) 篇にある詩．8行の詩．

ホイットマンが死の触手を感じながら，この世に託した望みのすべては，代代に引き継がれて行く「前進」，「何処かへ」(Somewhere) の「向上」であり，「限りなく続く民衆」であった．本詩中，今は亡き，高貴なる一人の女友だちが語ることばは，そのままホイットマンの意図を表現したものであろう．

……………—"The sum, concluding all we know of old or
modern learning, intuitions deep,
"Of all Geologies—Histories—of all Astronomy—of Evolution,
Metaphysics all,
"Is, that we all are onward, onward, speeding slowly, surely
bettering,
"Life, life an endless march, an endless army, (no halt, but it is
duly over,)
"The world, the race, the soul—in space and time the universes,
"All bound as befitting each—all surely going somewhere."(37)

（私たちが知っているかぎりの古今の学問，深遠なる直覚，
一切の「地質学」——「歴史学」，一切の「天文学」——「進化」の研究，
そして「形而上学」のすべてを決定づけるように，総括すれば，
それは，私たちは皆前へ前へとゆっくり歩を進め，
着実に向上しているということです．
生命よ，あなたは終りなき前進，そして果てしなく続く民衆なのです．
（休止などありません．でも今はまさしく終わりました．）
世界，民族，霊魂——空間と時間のなかで，これらもろもろの宇宙はお互いに相適（かな）って，
結合しつつ，すべてが確実に何処かへ前進しているのです．）

。「老水夫コッサボーン」(Old Salt Kossbone)　(1888)

前詩と同様，「古稀の流砂」篇中の詩．

船の行く先を案じ，その安全を見究めながら死んでいった彼の父祖の一人，コッサボーンの死こそ，ホイットマンが全面的に肯定するものであった．

At last at nightfall strikes the breeze aright, her whole luck veer-
　　ing,
And swiftly bending round the cape, the darkness proudly enter-
　　ing, cleaving, as he watches,
"She's free—she's on her destination"—these the last words—
　　when Jenny came, he sat there dead,
Dutch Kossabone, Old Salt, related on my mother's side, far
　　back.(38)

（結びの４行）

（とうとう夜になって，微風(そよ)が正面(まとも)に吹いてくると，彼女の船運(ふなうん)は良くなった.
すばやく岬をまわると，船は彼の見守るうちに，誇らかに闇の中に分けていった.
「船が行くぞ.――目的地に向かっている.」――これが最後の言葉だった.――
　　ジェニーが来てみると彼は椅子に坐ったまま死んでいた.
老水夫，オランダ人のコッサボーン，母方の遠い父祖の一人にあたる人だ.）

◦「死からの声」(A Voice from Death)　(1889)

「我が空想よ，さらば」(Good-Bye My Fahcy) 篇にある詩.

この詩篇は，その大部分が彼に迫り来る「死」と，それへの想いに捧げられ，その表題は同時に「生」への決別を示すものであった.

本詩は，1889年５月31日，ペンシルバニア州，ジョンズタウン（Johnstown）での大洪水（cataclysm）下の事故を取り扱ったもの．数千人の命が一瞬にして絶たれたという事実とともに，一人の母親にさしのべられた救済の手と，そしてその母親から赤子が誕生せる事実を重視している．死の背後にひそむ生の探知であろう.

またかかる無残な，多数の死の跳梁から，荒廃した泥土の中から，人間愛と「同胞援助」(human aid) の清き花が咲き出てくる事実に感嘆するのである.そこには,「偉大な自然の力の陣痛現象」(mighty, elemental throes) にたいする，彼の深く徹した認識が看取される.

◦「たそがれの歌」(A Twilight Song)　(1890)

同じく「我が空想よ，さらば」篇中の詩.

過ぎし日の戦場の光景をしのびながら，アメリカの東，西，南，北の各地から集まった無名の兵(つわもの)たちの死を静かに追悼する．この詩には，1890年５月,「世紀」(*Century*) 誌にのせられたときは,「南北両軍の無名戦没者のために」(For unknown buried soldiers, North and South) の副題がついていた．かなりの推敲(こう)の跡が，残存している草稿にみられる詩.

Each name recall'd by me from out the darkness and death's
　　ashes,
Henceforth to be, deep, deep within my heart recording, for
　　many a future year,
Your mystic roll entire of unknown names, or North or
　　South,
Embalm'd with love in this twilight song.(39)

（結びの４行）

（一人一人の名前が，暗闇と屍灰(しかい)のなかから思い出される.
これからは幾久しき年月，我が心の記録のうちに深く深く秘められるだろう.
北軍であれ，南軍であれ，君ら名もなき兵(つわもの)たちの不思議な名簿は，そっくりそのまま，
愛をこめて，たそがれの歌の中に香り床しく記されるであろう.）

◦「我が空想よ，さらば！」(Good-Bye My Fancy!)　(1891)

「我が空想よ，さらば！」篇の最後にある同題の詩.

長い間，ともに暮し,喜びを分かちあった空想は,時が刻まれ,夜が訪れるとともに退場して行くのである.

If we go anywhere we'll go together to meet what happens,

(第14行)

(私たちが何処かへ行くことでもあれば，一緒に行こう．そして協力して事に当たろう．)

May-be it is you the mortal knob really undoing, turning—so
　　now finally,
Good-bye—and hail! my Fancy.[40]

(結びの2行)

(まことに，人の世の扉を開き，回転させる取手(とつて)は，君自身なのかも知れない.
　　それでは，これが最後だね.
さようなら，——御機嫌(げん)よう！我が「空想」よ.)

同じ1891年の「永遠の船路に出でよ，幻の船」(Sail Out for Good, Eidólon Yacht!) は，既述の「喜べ！同船者よ，喜べ！」の詩の感懐の究極的展開であるが，より決定的なタッチで描かれており，詩中の船はもはや「幻の船」(eidólon yacht) となっている

◦「死の谷」(Death's Valley)　(1892)

これは「草の葉」一巻とは別に，「老翁余韻」(Old Age Echoes) の中にある詩.

将卒，老幼，貧富をとわず，いろいろの人間の死を見詰めてきたホイットマンは，長い間，自分の暗黙の想念のなかに呼吸しつづけてきた「死」を，荒涼や暗黒に対していだく怖れとは違った，いわば恵みあまねき光と，清浄な大気に対するような安らぎの念をもって迎え入れようとするのである.

Thee, holiest minister of Heavn—thee, envoy, usherer, guide
　　at last of all,
Rich, florid, loosener of the stricture-knot call'd life,
Sweet, powerful, welcome Death.[41]

(結びの3行)

「天国の有徳の使節であるあなた——すべてのものの殿(しんがり)を承る使節であり，
　　嚮導者(きょう)であり，道案内者たるあなた，
生命と呼ばれる，しっかり結ばれた結び目の，寛容で元気な解き手(はど)，
これぞ，優しく，穏やかかな，嬉しい「死」である.)[42]

× × × × ×

1892年3月26日の夕方，看護人のウオレンに,“Warry, shift.”(「ウオリー，寝返りさせてくれ.」)と言ったのが，ホイットマンの最後の言葉であった.

彼の告別式の最後に，雄弁家である無神論者のインガソル (Robert Ingersoll) が，「私たちは，ここに再び『生』の神秘のうちに『死』の神秘と対面することになった．偉大なる人物，一人の偉大なるアメリカ人，この共和国の最も知名の市民は，いま私たちの前に横たわっている，私たちは彼の偉大さとその真価を顕彰するものである.………」と切切たる言葉で，亡き友ホイットマンの霊をとむらい，「我我が死して幾星霜の後も，彼が語った雄雄しき言葉は，トランペットの如く，死に行く者の耳朶に鳴りわたるであろう.」(Long after we are dead the brave words he has spoken will sound like trumpets to the dying.) という予言的な一句でその弔辞を結んだ.

彼の死体は，解剖に付された後，ハーレイ墓地 (Harleigh Cemetery) にある，灰色の，花崗岩(こう)の墓に埋葬された．墓のデザインは，ホイットマン自身がブレイク (William Blake) のデザインにもとづいて，建てさ

せたものと言われる．それは，ロング・アイランドの彼の出生地とともに，世界の各地より年年訪れる多数の人人のための聖城(メッカ)となっている．

× × × × ×

ホイットマンにおいては，神の宇宙的遍在（pantheism）と，万象に瀰(び)漫しつつ神聖なるものの仲立ちとなる霊（panpsychism）が，常に共存している．彼にとっては，「死」のイメージは先ず東洋的な美しい沈静として感ぜられるが，そのままそこに安住するのではなく，絶えざる前進である「生」の別の姿——すなわち「新しき生」への出発として，アメリカ的に，ダイナミックに捕えなおされる．

ホイットマンの「不死」の想念において，「生命力」(life-force) による「死」の克服がみられることは，エマーソン（Ralph Waldo Emerson）(1803—'82) と共通しているが，その「不死」は，エマーソンのように倫理感，「新克己主義」(neo-stoicism) に裏付けられたものでなくて，もう少し本能的な解放であり，あらゆる時代に行き渡ることを目指すものであった．(43)

プラトンの言えるごとく，詩人は彼の架空性（fable）によって，「理解」に内包される不安を除去し，「霊魂のうちなる子」(the child in the soul) を魅することができるのである．これこそホイットマンが，その「直覚力」(vision) をもって，彼の詩をとおし，我我に示すところのものであろう．

ローレンス（D. H. Lawrence）によれば，「ホイットマンの道徳は，救済の道徳ではなく」(His morality was no morality of salvation.)，(44) 自らの救済とはかかわりなしに生きてゆく霊魂の道徳であった．

非国教徒（nonconformist）であったホイットマンが，「宗教」(Religion) についての講演のために用意したノートによると，事物には相対立しながらも融合する二つの要素として，腐敗と死滅の性格をもつ「肉体の要素」(bodily element) と，前進し，不可知の方法で永続する「霊魂」（Soul）の要素とが内在するのである．しかも彼の類推はつぎのように進んでゆく．

> "……—that the Soul of the Universe is the Male and genital master and the impregnating and animating spirit—Physical matter is Female and Mother and waits barren and bloomless, the jets of life from the masculine vigor, the undermost first cause of all that is not what Death is.—"(45)
> (「宇宙の霊魂」は「男性」であり，生殖の営みの支配者であり，飽和させ，活気づける霊である．それに対し，「肉体」を形成する物質は「女性」であり，「母」である．それは不毛にして，花をもたず，「死」ならざる一切のものの，基底的な第一原因である男性的活力から発動する生気を待ち受ける．)

また，「神の不変性についての考察」(Notion of the Immutability of God) においては，神は，それ自体「完成された建築物」(a complete edifice) ではなくて，王冠であり，仕上げであり，多くの基礎建築の上に据えられた尖塔（pinnacle）であるという．そして，「神」の存在が人類の歴史に及ぼせる功罪を考量しながらも，その存在を認容するのである．

科学者たちが，「神」の観念にたいして暗黙のうちに，或は公然と示す侮蔑(べつ)については，それにくみせず次のように記している．

> "That idea seems to me to come out of the abysm—not that it is true, but it is a faint indication of the all-enclosing truth, perhaps indirection (as much as the masses can hold) of the truth beyond all science."(46)
> (この「神」の観念は，私には深遠なるところに根ざしているように思われる．「神」が真実なるものと言うのではなく，すべてを取り囲んでいる真理を，ぼんやりと指示するもの，おそらくは，(大衆が考えうる限りにおいて)，一切の科学が及び得ない真理を遠回しに示すものとして考えたい．)

× × × × ×

晩年の彼の病床に去来した懐疑のひととき，神への祈り，苦悩のうちなる「死」の待機，……だが，結局は「死」そのものが「神」に昇格していった．すなわち，「超時空的霊魂」の観点から，「生」の発展的な姿として「死」をみることこそ，彼の「死観」の本質であり，収穫(とりいれ)の喜びをもってそれを迎え入れる態度こそ，

彼に本来なるものであった.

たとえば,「収録されざる断片的原稿」(Uncollected Manuscript Fragments) の中にある「死後」(After Death) の詩に示されているように, ホイットマンは「一人また一人」(one after another) と「何万人もの愛人」(ten thousand lovers) を後世に期待し, そこに, 自らの「永遠の生」を見出そうとするのである. それが自然発生的 (spontaneous) な表現に成った "Leaves of Grass"一巻の大きな意図であり, この意図こそ, 彼の生涯を通じて, その広大なる「愛」の精神を軸として, 回転しつづけたものであろう. 現在に, そして未来に生え出づる「草の葉」の力を, それ自身のうちに宿しながら………

(注)

(1) Harold W. Blodgett and Sculley Bradley, *Leaves of Grass*, p.331

(2) Encyclopedia Americana vol. 28, pp. 705—706

(3) たとえば,「カラマス」(Calamus)篇の「かち得た名声を思うとき」(When I Peruse the Conquer'd Fame), などの詩で賛美されている.

(4) 彼は奴隷廃止論者であり, 死刑反対者であった.

(5) 彼が約6年間在籍した, 公立小学校に登校していたおり, 近くのブルックリン海軍造船所で発生したもの.

(6) 郷里ロング・アイランドの小学校教師. また知人ブレントン家の家庭教師にもなった.

(7) Gay Wilson Allen, *Walt Whitman*, p. 19

(8) Thomas L. Brasher, *Walt Whitman: The Early Poems and the Fiction*, p. 32

(9) 鍋島能弘著, ホイットマンの研究 (篠崎書林刊), p. 9

(10) Allen, op. cit., p. 48

(11) 清水春雄著, ホイットマンの心象研究 (篠崎書林刊); p.186

(12) Floyd Stovall, *Walt Whitman : Prose Works 1892*, Vol. I, *Specimen Days*, p .99

(13) 奇しくも彼ブライアントは, その6月に幽冥の人となった.

(14) Blodgett and Bradley, op. cit., p.553

(15) Ibid., p. 487

(16) 清水春雄著, 前掲書, p. 117

(17) Floyd Stovall による区分で, Stephen E. Whicher などが支持している.

(18) 1857—'59年, ホイットマンは「ブルックリン・タイムズ」(Brooklyn Times) の編集にあたっている.

(19) 1865年の4月14日には, 彼の尊敬する大統領リンカーンが暗殺されている.

(20) 19年が26年となる.

(21) R. W. B. Lewis, *The Presence of Walt Whitman*, p. 7 ; Stephen E. Whicher, *Whitman's Awakening to Death*

"This dark element in the poem is by no means incidental ; it is the enemy the hero exists to fight. 'Song of Myself' is the epic of his victory."

(22) 長沼重隆訳, ホイットマン　草の葉　下巻 (三笠書房刊), p. 179

(23) Lewis, op. cit., p.10

"……………, just as the theme of death can enter this poem with so little resistance because these dead are not dead, but sleepers merely."

(24) 船橋雄解説, ホイットマン詩選 (研究社刊) pp. 35—36

(25) この所信が詩人の作詩時のものであることは, 1881年に詩中から取り除かれた, "O, you dear women's and men's phantoms!" で終る7行のなかに明瞭にうかがわれる.

(26) Roy Harvey Pearce, *Whitman : A Collection of Critical Essays*, p.55 ; Roy Harvey Pearce *Whitman Justified : The Poet in 1860*,

"He has, as only a poet can, *made* a word out of the sea—for the duration of the poem understood "*sea*" as it may be into "*death*"—"*ever death.*"

(27) Floyd Stovall, *Walt Whitman*, pp. 139—140

(28) Basil De Selincourt, *Walt Whitman : A Critical Study*, p. 209

"Its aim is to associate togethr the ideas of love and death, to suggest that the true meaning of the relationship of souls transcends all the shows of life and is the fundamental purpose of the world."

(29) Blodgett and Bradley. op. cit., p. 307

(30) Ibid., p.320—321

(31) Ibid., p.367

(32) Ibid., p.418
(33) Ibid., p.501
(34) Ibid., p.498
(35) Allen, op. cit., p.107
たとえば1868年，彼は月刊誌「アトランチック」(the *Atlantic Monthly*) から，その詩，「誇らしき嵐の調べ」(Proud Music of the Storm) に対し100ドルを，既述のブロードウェイ誌より，「天界よりの死のささやき」に対して50ドルを送られている．
(36) Blodgett and Bradley, op. cit., p.422
(37) Ibid., p.525
(38) Ibid., p.522
(39) Ibid., p.549
(40) Ibid., p.558
(41) Ibid., p.581
(42) 長沼重隆訳，前掲書，p.343
(43) Floyd Stovall, *Walt Whitman : Prose Works 1892*, Vol. II, *Collect and Other Prose*, p.517 (Notes Left Over, Emerson's Books)
"Of *power* he seems to have a gentlemans' admiration—but in his inmost heart the grandest attribute of God and Poets is always subordinate to the octaves, conceits, polite kinks, and verbs."
「(詩にひそむ) 力については，彼 (エマーソン) は紳士然とした崇拝をしめすにとどまって，その心の底では，「神」や「詩人」のもつ壮大な特質は，いつも，詩形や自負心，上品な偏執性や表現上の技巧の下位におかれていた．」
(44) Pearce, op. cit., p.19 (D. H. Lawrence, *Whitman*)
(45) Clifton J. Furness, *Walt Whitmans' Workshop*, p.49
(46) Ibid., p.53

昭和41年11月30日受理